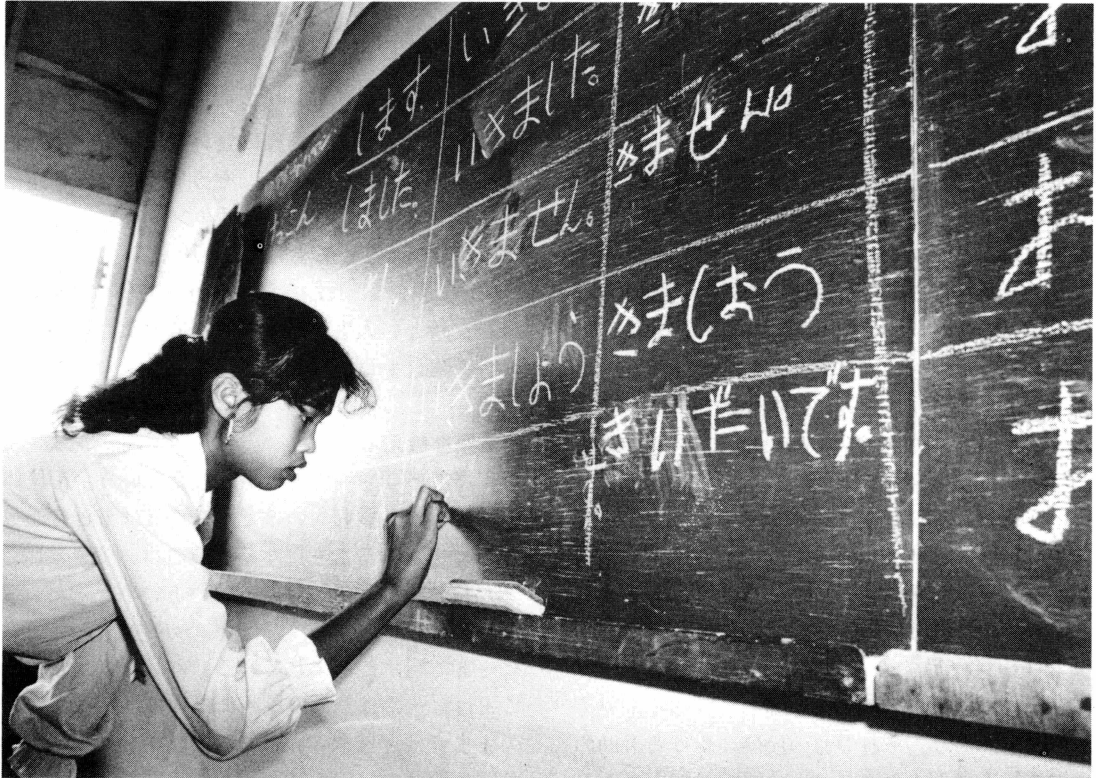


Trial & Error

トリアル・アンド・エラー

No.85

試 行 錯 誤



日本語の活用変化も勉強します（毎日新聞社提供）

特集 日本語を教える

— 定住難民と日本語教育

パナニコムJVC日本語学校	2
定住難民と日本語教育	4
ボランティア団体と日本語	6
幼い難民を考える会、葦の会、 大和日本語教室、難民を助ける会	
JVC定住難民訪問ボランティア	10
日本語教師 教師の責任は重い	12
としての体験 「わたしいつ日本へ行きますか」	13
いがらし君の難民キャンプ潜入記①	14
いんたびゅう 禅林寺龍華会 木村得玄さん	16
シリーズ NGO活動を見直す	17
アジア民話の旅 かみなりさまと宝石	18

パナニコム JVC日本語学校

日本語学校コーディネーター、日本語教師 フォード順子

朝8時50分。「おはようございます」という元気のいい声とともに一日が始まる。ここは、バンコクから車で2時間ほど東へ行った所にある、パナニコム難民キャンプの中のJVC日本語学校。日本へ定住の決まった、カンプチア、ラオス、そしてベトナム難民が、出発までの期間を毎日日本語の勉強にやってくる。国境のキャンプからパナニコムへ来た時には、日本語を一度も耳にしたことのなかった難民たちが、約4カ月滞在した後、日本へ旅立つ頃には、日本人の習慣もわずかながら身に付けて、簡単な日常会話をこなすようになる。

教え子の一人が目を輝かせて話してくれた。日本へ行ったばかりの時、日本人の言うことはあまり分からなかったけれど、こちらの言うことは全部通じた。聞き直せばもう一度言い直してくれたので、大体分かったと。

難民が日本に定住する過程を眺めてみると、いくつかの段階があり、それぞれの段階における援助の仕方があると思う（国境のキャンプで、パナニコムで、定住センターで、センターを出てから等）。そのどれもが彼らにとっては等しく必要なものである。その中であって、パナニコムですべきことは何かということを問い続け、私なりの解釈で、JVC日本語学校をこれまで運営してきた。定住難民にとって、最も大きな問題のひとつである日本語。それに初め接する場所であるJVC日本語学校を、ここに少し紹介してみたい。

生徒の背景

教育を行うとき、最初に問題になることのひとつに、誰に教えるか、ということがある。私たちの場合、はじめにも述べたように対象はインドシナ難民である。日本へ行く難民で、鉛筆の持ち方を知らない人はまずいない。文盲の率も低い。しかし、全員が学校教育をきちんと受けてきたというわけではない。したがって、勉強の仕方を知らない。さらに、

キャンプ生活が7～8年という難民も中にはいる。苦境を切り抜けてきて後の長いキャンプ生活は、人々を無気力にしてしまう。そういう人々に日本語を教えるのである。最初のオリエンテーションの時、頭の切り換えをしてもらうために、いつもこう告げる。「皆さんはこれから日本へ行って暮らすんです。今日、新しい人生が始まったんですよ。さあ、日本語を勉強しましょう」と。

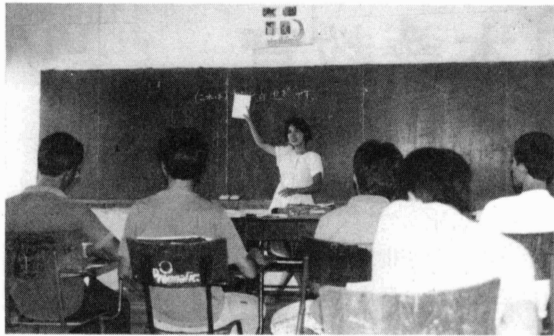
日本語を教える

実際にどうやって日本語を教えているかを具体的に説明する紙幅もないので、ここでは方針を述べるのみにとどめることにする。それは、できる限り自然な日本語を身につけさせたいということだ。また、耳を慣れさせるために、はじめから敢えて速いスピードで話すことにしている。ゆっくり話してやることは、一番はじめの段階にあっては親切だが、そのままでは、日本人の普通の会話がいつまでたっても聞き取れないようにしてしまう。

私自身、常に厳しい先生でありたいと思っている。特に生徒の発音に関してはうるさい。彼らが日本へ行って、日本人と話した時に通じないような発音では無意味だからだ。

日本文化・習慣を教える

日本語学校であり、日本語を教えることが中心ではあるが、それだけでは決していない。日本社会にうまく適応してゆけるように、日本人の習慣、振る舞い方なども同時に指導していかなければならない。もっとも、ことばを教えるということは、そのことばでコミュニケーションすることを目指しているのであるから、言語行動だけでは片手落ちだ。身近な例で言えば、「おはようございます」と言うときは頭を下げる、「はい」と相槌を打つときは頷く、といった非言語行動が自然に出てこなければ、それは本当に日本語を教えたことにはならない。こういったこ



日本語の授業は厳しい

とが、いわゆる日本人の習慣、振る舞い方といったものにつながっていく。習慣はことばと全く切り離して教えられるものではないと思う。

日本語学校の事務室のドアに2枚の貼り紙をした。それぞれ「クメール語、ラオ語、ベトナム語で、部屋に入る前、去るときに言って下さい」とあり、「しつれいします」「しつれいしました」と、ひらがなが書いてある。生徒は部屋に出入りする度に、おじぎをしてこれを言わなければならない。はじめは言いづらかったことばも、だんだんすらすらと言えるようになってくる。こうして日本人の習慣を身に付けることができるようにしている。

生徒の一人が、まだパナニコムにいる時に、笑いながら次のように話してくれた。アメリカ人と英語を話す時にも、つい癖で、知らない間に「はい、はい」と頷きながらきいていた。それで笑われてしまった、と。

パナニコムですべきこと

パナニコムですべきこと。それは第一に、日本へ行ってから、定住センターで勉強をしていく、その素地を作ってやること、すなわち、決められた時間までに教室へやって来て、一時間をクラスの仲間と協力して一緒に学ぶという姿勢を身に付けさせることだと、私は考える。だから、例えば遅刻には大変うるさい。生徒もそれが分かって、時間を厳守するようになってくる。

次に、日本語をできるだけ先まで教えること。なぜなら、パナニコムにいる間に日本語を多く学んでおけばそれだけ、日本へ行ってからの学習もスムーズに、かつ速く進むからだ。話はややそれるが、定住難民の人の家庭をいくつか訪れたことがある。その時、日本人と全く同等に日本語を操る、あるい



文化オリエンテーション(かるたとり)

は日本語しか話せない子供たちと、ごくわずかの日本語しか自由にならない母親の「会話」を目のあたりにして愕然とした。これに関しては様々な意見があるだろうが、私は「お母さん、日本語をもっと頑張って」と、心の中で叫ばずにはいられなかった。

何でもそうであるが、基礎さえしっかりしていれば、その上に積み上げていくことはそれほど困難なことではない。定住センターにいる間に初級をひと通り終えることができれば、彼らもその後ずい分と楽になる。少しでも多くの日本語を学んでおけば、定住した時に職場で、地域で、そして家庭で、それが役に立つ。同じテレビを見るにしても、ことばを理解して見ると、ただ画像だけを追うのとでは、楽しみがまるで違う。

そして最後に、最も大切なことだが、JVC 日本語学校は、その対象の性質から単に日本語を教えることだけに終わるはずはなく、また初めからそのつもりもない。心理面において、彼らに何らかの支えを提供したいと願ってきた。はじめにも述べたように、キャンプ生活の長い難民ほど無気力で、勉強もしない。そういう人々には、お説教もするし、お尻をたたいて勉強をさせなければならない。しかし、やがて皆が勉強することの楽しさをつかみとっていつてくれる。毎日勉強に来るのが本当に楽しそうだ。私たち教師にとっては嬉しい土曜、日曜も、彼らにとっては、先生が来ない、勉強のできない、つまらない日だということ。月曜日が待ち遠しいと言われて思わず微笑んだ。

今回これを書いてきて最後に思うのは、やはり、日本語が定住の際の壁になってほしくない、ということである。そうしないために、私たちはこれからも頑張っていかなければならない。

定住難民と日本語教育

日本に定住する難民の日本語教育が不十分だという指摘がある。その原因として3つの要素が考えられる。1つは日本政府の難民受け入れ体制の不備、もう1つは日本社会の、言いかえれば私たちの定住難民への理解のなさ、そして難民の側の問題である。難民たちのなかには初めから日本を定住先として選んだのではなく、本当はアメリカに行きたかったのだけれど、インタビューを受けたらたまたま日本が受け入れてくれたという人、また長いキャンプ生活の結果、新しい言語を学ぶ意欲を失ってしまった人など積極的に日本語の勉強ができない人も少なくないものである。

それでは難民たちはどのように日本に定住し、日本語を学んでいくのだろうか。ベトナムのボートピープルは直接日本に来る場合と、東南アジアの難民キャンプにいったん収容された後、日本に来る場合がある。前者は国際救援センターで、後者は姫路定住促進センターでそれぞれ日本語教育を受ける。2カ所に分かれているのは、収容能力の問題と、救援センターにいる人々の多くがさらに次の国への定住を目指しているのに対し、定住センターで訓練を受ける人々は一応日本定住を希望して来たなど、その立場が少し異っているためだ。

ラオス、カンブチアの難民は日本への定住が認められると、タイの首都バンコクから車で2時間ほどの所にあるパナニコム第三国定住待ちキャンプに収容される。ここで数カ月間第三国で使う言語や文化を学び、定住のための準備をする。その後日本の大和定住促進センターで語学訓練、職業訓練を受けた後日本社会に定住する。JVCが長くかかわっているラオス、カンブチアの難民を例にとり、日本語を学んでいく課程とその問題点について考えてみたい。

パナニコム — JVC日本語学校

日本語学校の授業は月曜から金曜までで、1人1日2時間学ぶことができる。教材は大和定住促進センター及び国際救援センターで使っている『日本語の基礎』Ⅰ、Ⅱ(凡人社)を用いている。

クラスは能力別に分けられるため、異った年齢の人が机を並べて日本語を学習する。子供は10歳以上

である。まず彼らは「あいうえお」の書き方と「こんにちは、私はティアです」などという簡単な会話を平行して学んでいく。50音がなかなか覚えられないお年寄りや子供は、授業が終わった後や教師が手のあいている時に個人レッスンを受ける。日本語の習得には個人差が大きく、自己紹介が精一杯の人がいるかと思えば、「あなたはなぜここへ来たのですか」などという意地悪な質問をして喜ぶくらいの人まで千差万別である。

ひらがなを覚え、会話が少しできるようになったころカタカナを導入していく。これがやっとマスターできたかどうかという時に日本に行くケースが多い。学習期間は日本政府の受け入れ政策の影響を受け定まてはいないが、ここ1～2年は、1～3カ月と期間が落ちついてきているようである。

日本語学校では日本語学習のほかに、週末に数時間日本文化の紹介の時間も設けている。ここでは日本の生活や食生活を知るために映画を見たり、日本の料理を実際に作ったりする。生徒にとっては勉強であると同時に、ホッと息の抜けるレクリエーションの時間となっている。

また就学前や小学校低学年にあたる子供たちは、子供クラスとして、クイズやパズル遊びを通して日本語の習得を計っている。

大和定住促進センター

JVC日本語学校では日本での訓練に役立ててもらおうと、1人ひとりの語学習得力や学習姿勢の記録を難民たちが日本に定住する際、大和定住促進センターに渡している。センターではこの資料と面接をもとに、新たな能力別クラス編成を行い、それから4カ月間(572時間)、本格的な日本語教育が始まる。またこの期間には、同時に、布団の敷き方、衣類の身のつけ方など生活の基本が指導される。

センターで学ぶ日本語は基礎的なもので、期間も短いため実社会ですぐ役立つというわけにはいかない。その上、病気や出産で授業を休むと、遅れた分は自分で取り返すしかなく、センターで学ぶだけではどうしても不十分である。しかし限られた予算のなかではセンターの能力に限界があり、現状を急激

に改善することはできない。したがって民間などのアフターケアの重要性が問われることになる。

センターで学んだことを生かし、引き続き日本語を勉強していけば、または勉強したことが生かされる場があれば問題は少なくなるだろう。しかし、難民たちは、朝から晩までの授業と宿題に追われる頭の痛い日本語学習を終えてセンターを出ていく時に、教科書をボイと捨てていってしまう。そして教科書はセンターにいる時以上に必要だと気づいた時にはもう手遅れ、ということもある。

日本社会に出て—ボランティア団体によるアフターケア

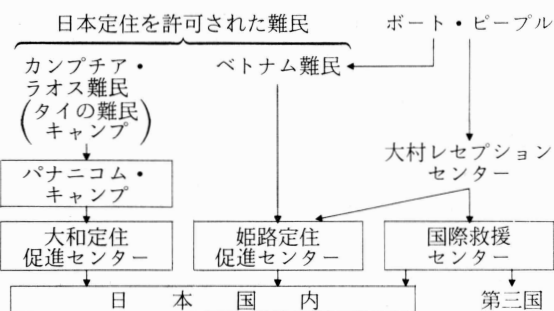
センターでの4カ月間の日本語教育、及び社会適応訓練を終えると、それぞれ就職先を紹介され、難民たちは日本社会に定住する。そして日本語教育は彼らを取りまく社会、企業、ボランティア団体などに任される。

ボランティア団体の活動は週に1～2度、2～3時間ほど定住難民の家庭を訪問して日本語を教えたり、生活のなかでわからないことがあったら相談に乗ったりという形態と、決められた日に公共の集会場、あるいは個人の家でグループ学習をするという教室の形態がある。教室の場合は生活の場から切り離された所で、仲間たちといっしょに学ぶことができる。逆に家庭訪問の場合は自分の都合のいい日に、個別にじっくりと日本語を学べる。両方とも長所と短所があるが、大切なのは、やはり生徒のやる気だ。センターで学んできたことを土台にして語学力が伸びていけばいいがなかなかそうはいかない。会社に通い、近所づきあいをし、学校へ通うのに精いっぱい、とても日本語どころではないという人もいる。

ところが、センターで学んだ言葉を自分で使ってみると通じるのに、相手の言っていることがわからないという問題にぶつかる。日常生活では教科書のように「です、ます」調で話すことはあまりないからだ。ここで座折してしまう人とこれからだという人に分かれるが、一家の生活を支えているお父さん、お母さんには熱心な人が多い。

そして日本語の教科書は、JVCの場合、生徒の要望、やる気、レベルなどを考慮しながら『日本語の基礎』を使ったり、新しい教科書を選んでいる。ほかのボランティア団体もボランティア自身が生徒の状況に応じ教科書を選んでいるところが多いようだ。

日本語教育の流れ



今後の課題

パナニコムのJVC日本語学校、大和定住促進センター、国内のボランティア団体と、難民が日本語を学ぶ流れはできあがっているが、三者をまとめるシステムはまだない。各々がそれぞれ一生懸命やっているなかを、時を追って難民が順番に進んでいるという感じだ。これらの連携をスムーズに運ぶには情報交換が必要なのだが、それには難しい問題がある。

難民はパナニコムの日本語学校、定住センターにおいて、日本語能力やバックグラウンド、性格等の個人情報を持っており、それは生活指導、日本語教育の面で欠かせないものだ。ボランティア団体が日本語教育をはじめとするアフターケアをしようと思えばそれらはとても参考になる。が、同時にプライバシーにも触れることになる。それらがもし外部に漏れた時は誰が責任をとるのか。

ボランティア団体が就学年令に達した子どもの入学手続きをとったところ、センターとしてはその子の学力としてはもう一年入学を遅らせるつもりだったというケースなど、情報が届かなかったためにトラブルが生じたことがあった。しかしこの場合、誰にでも情報を流すことはできず、センターとボランティア団体の信頼関係によって解決するしかない。このような個人の情報はともかく、パナニコムの日本語学校、定住センター、ボランティア団体の意見交換の場はもっと必要だ。一貫した語学教育ができれば難民も勉強しやすい。

一方ボランティア団体の間では、今年3月に神奈川県で聞かれたNGOフォーラムをきっかけとして情報交換を行うためのネットワークができた。しかしまだその活動は充分でなく、せっかく作ったネットワークをいかに発展させていくかが課題となっている。(柴田くす子、落合正幸、編集部)

話し相手になることが大事

インドシナ難民の大量流出をきっかけにいくつかの難民救援団体が生まれた。はじめは難民キャンプでの活動が中心だったが、今は彼らの定住先である日本にその比重が移りつつある。日本が難民を受け入れて9年がたち、問題が多様化してきたため、定住難民のケア、あるいは交流を中心にする地域のグループも生まれている。

難民が日本で生活するのに最も大きな障害で、彼らの悩みともなっているのが日本語だといわれている。それらの団体では日本語教育に対しどのような取り組みをしているのだろうか。

若い難民を考える会は子供に関心を寄せる人たちが中心となり、1980年に生まれた。戦争で一番被害を受けるのは小さい子供たちだ。混乱のなかで忘れられてしまった子供の教育に目を向けようと、設立以来タイのカオイダン難民キャンプで保育活動を行っている。その一方で、87年5月から日本に定住したインドシナの人への訪問活動「訪問ボランティア」も開始した。1年半たった今、この活動はインドシナの人たちになくてはならない存在として頼りにされている。

プログラムが始まったきっかけは、難民キャンプで働いていたスタッフが、それぞれ知りあいのインドシナの人を時々訪れていたことによる。それが、組織的な活動に発展していったものが「訪問ボランティア」である。現在訪問者は23人。男性も2割ほどいる。対象家族は約50家族。この数字には、不定期に訪ねている家庭も含まれている。

活動は日本語学習や子供の勉強に協力したり、日本での生活相談を受けることを通してお互いの交流を深め、友人としてつきあっていくことである。したがって一方的に日本的な考え方を押しつけることには注意している。彼らの文化・生活慣習を通して学ぶことも多い。

日本語を教えることが中心になっているのは日本語に不安を持っている人が多いためで、昨年から始まったカンブチア語による電話相談でも日本語を学びたいという声が圧倒的だ。会の性格上かわっているインドシナの人の多くは家庭の主婦である。家



相談員ミム・ソアンさんの
峯村さん(右)と、電話
「訪問ボランティア」担当

に閉じこもりがちで彼女たちの日本語の話し相手は少なく、子供たちの日本語がどんどん上手になっていくなかで孤立感を深めているようだ。実際上の不便もある。子供が学校からもらってくるプリントも読めないし、市の広報紙などもわからない人が多い。

そんなおかあさんたちに大切なのは話し相手になることである。あいうえおを勉強するばかりでは言葉は上達しない。というより、今生活に必要な言葉、実際に使う言葉が求められているのだ。したがって今のところ日本語の教え方については細かいことはいわず、ボランティアに任せている。また訪問ボランティアには女性が多いため、日本語の勉強のほか料理なども教えあうこともある。

今年の9月、この訪問活動に強い味方が生まれた。ひらがな新聞、『こんにちばCYRです』である。この新聞はまだ第一号しか出ていないが大変反響が大きかった。子供たちに日本の料理をせがまれるせいか、天ぷらのつくり方も好評だった。

このように若い難民を考える会は女性たちが主体になっているため、活動はきめ細やかで気配りがゆき届いている。国内活動を担当している峯村さんは会の姿勢について次のように述べてくれた。「今私たちの活動は関東では東京、埼玉、神奈川の3県にまたがっています。インドシナの人たちはいろいろな所に散らばっているので訪問ボランティアを探すのが大変です。ただし遠くから人が出かけるだけでなく、インドシナの人たちにとって地域社会が開かれ、温かく受け入れてくれるのであればもっと暮らしやすくなるはずですよ。ですから将来は身近な人の手による地域社会に根づいた活動にしていきたいと思っています。私たちのしていることはインドシナの人々と地域の橋渡しといえるのではないのでしょうか」

日本語とのかかわりは今後の課題

葦の会はメンバー18人の小じんまりとしたグループだ。リーダーの世古さんはISSの難民定住相談員として難民相談を受け持っていた。その時の経験が葦の会を作る下地になっている。83～84年ごろ世古さんが担当していた地域は厚木、相模原、愛甲だったが、30家族はいたのではないかという。

いろいろな相談事があった。具合が悪いのでいっしょに病院に行ってくれないとか、子供が学校から持ち帰る書類を読んでほしいとか。そのたびに世古さんはかけつけたのだが、病院といっても自分が住んでいない所ではどこがいいのかまったくわからない。親切で、あまり待たない病院となるとそこに住んでいる人の評判に頼るしかない。買い物にしても、よい店は地元の人が1番良く知っている。難民の近くに住んでいる人が日常生活を手助けするのが1番いいのではないかと、御自分の住んでいる地域、相模原で今の活動を始めた。昨年の4月のことだ。

会の体裁が整うまでにはそれから数カ月かかったが、今ではカンブチア人、中国系ラオス人の協力者も得て、通訳は一応カバーしている。主な活動内容は生活相談だ。役所の手続きや病院の問診票の書き込みを手伝ったりしている。会のできたころは日本語を教えるつもりも自信もなかったのが、日常生活に必要な言葉以外は特に意識して教えるということではなかった。しかし、しだいに難民の人のなかから日本語を教えてほしいという要望が高まり、現在は8人の会員が日本語を教えている。テキストは定住センターで使っていたものをもう一度使っている。教え方は各自に任せているが、月1回の経験交流会を開いたり、日本語教育の専門家に教え方のコツを

聞くなどしている。世古さんがISSで生活相談をしていたころは、センターを出てすぐの人でもある程度の会話はできたが、しだいに日本語能力は落ちていくという。センターを退所する時にもう日常生活の手引き書には、日本で生活する上でのこまごまとしたことが書かれていて、これを見ればだいたいのはわかるのだが、新品のまましまいこんでいることもあるようだ。本を読む習慣があまりないためらしい。そのような時は彼らといっしょに銀行や郵便局に行きながら日本の生活と日本語を教えている。回覧板が何のことかわからずためこんでしまったこともあるという。もちろんこれは単に言葉だけでなく、他人に関心を持たない日本人の責任でもあるのだが。このように日本語にかかわる問題も多いので、今後どのようにこの活動を展開していくかが目下の課題となっている。

葦の会の活動は、地域の住民による地域の定住難民の支援組織といえわかりやすいだろうか。会がカバーする範囲は狭いが、よく知っている地域のことなのですみずみにまで目がゆき届いている。しかし彼らが一方的に受け身にならないよう、自分たちの力で生きてゆけるよう注意も払っている。市役所などの公の機関に、小学校の入学通知や予防注射の連絡通知は彼らのわかる言葉で出してほしいと働きかけたのもそのためだ。難しい日本語で連絡が来ても彼らにはわからず、いつも日本人に頼ってしまうからである。この4月にも保育園に入る手続きを取ろうとしたところ、実際には就学年令に達していたケースもあった。世古さんたちの努力の結果、来年の新入生から3カ国語（ベトナム語、クメール語、ラオス語）の訳のついた就学案内が出されることになった。

もう1つの会の動きは彼らの文化活動の支援である。日本での生活が落ちついてくると、難民の人たちも自分のちの文化を見直すゆとりが出てくる。日本の人たちに自分たちの文化を見てもらいたい、または子供たちに文化を伝えたい。今年の7月は葦の会と相模原市国際交流協会が中心となり“カンボジアの夕べ”を催した。会員が核となり、地域の人々もまきこんで葦の苗は着実に根づきつつある。



葦の会代表 世古敬子さん
「近くに住んでいる人が支援するのが一番いいんです」

日本語教室と家庭訪問は補いあう

11月の日曜日、大和市の勤労福祉会館では2つの部屋に分かれ日本語教室が開かれていた。1つのクラスでは女性たちが日常会話を、もう一方のクラスでは車の運転免許を取るための若い男性ばかり6人が、自動車教習のテキストをくいいるように見つめながら学んでいた。

定住難民の生活相談や家庭訪問をするボランティアグループが多いなかで、大和日本語教室の活動は家庭以外の場所で日本語を教えるということに特徴がある。実はこの教室はJVCの日本語家庭教師活動から生まれたものだ。現在の代表である桜井さんもJVCのボランティアだった人である。2年ほど家庭教師を続けたころ壁にぶつかってしまった。住宅事情も悪いうえ、生活をかかえた家庭の中ではどうしても気が散ってしまう。また待っていれば訪ねてくれる人がいるので受け身になりやすい。彼らの積極性をひき出し、気分転換をはかるには生活と切り離された場で勉強する方がいい。桜井さんたち有志が集まり、84年現在の場所で日本語教室を開くことになった。JVCの活動は家庭教師と大和教室に分かれて続けられていたが、昨年JVCが訪問ボランティアを重視するため日本語家庭教師活動を定住難民プロジェクト切りかえた時、大和教室は解散の危機に直面した。しかし生徒がいる限りは続けようと、それを機会にJVCから離れ独自で運営することになったのである。

生徒数は定期的に来る人が24人。途中お休みしていたり、催し物の時にだけ来る人を入れれば100人ぐらいになる。なかには6～7年通い続けている人もいう。ほとんどが勤労者で、家庭の主婦は小さい子供のいない人だ。育児ボランティアがいれば幼児をかかえたおかあさんも来れるのだが、なかなかそういう人はみつからないという。桜井さんたちは教室だけの勉強にも限界を感じている。家庭を開けられない主婦のためにはどうしても訪問ボランティアが頼りだからだ。「教室も家庭訪問も必要です。それぞれがその活動を補いあえばいいのではないのでしょうか」。両方の活動を経験している桜井さんはそうに言う。そして「もう少しお互いに連携することができれば…」とつけ加えた。ボラ

ンティア活動はその人の持っている力の100パーセントを出してはできない。無理をせず、自分の力が出せる範囲ですればいい。大和教室の初期のメンバーが大ぜい残っているのはそのように心がけてきたからであろう。

この教室は名前で示すように日本語を教えるだけの所と思われがちだ。定住者の生活にかかわろうとせず、教室の中の先生と生徒の関係でしかないとの批判もあった。しかし、家庭の主婦が日曜日に家を留守にし、責任を持って日本語を教えるというのはそれほど楽なことではない。生徒たちの勉強するチャンスが日曜日にしかないといえれば、先生も自分の都合でそれを変更することはできない。寝たきりの両親をかかえた人、夫が手術をしたばかりの人、それぞれの事情がありながら、生徒との約束は守ろうとしている。「日本語を教えるだけ」でも大変なのである。

以前から大和教室の活動には、それぞれのお国自慢の料理を紹介する料理教室があったが、今年から社会見学やレクリエーションを兼ねた課外授業が加わった。8月に行われた「富士山バス旅行」には公募で参加した14人の日本人も加わり、総勢55人がかけた。長時間バスの中で過ごすためおしゃべりに花が咲く。初めて難民問題に触れた一般参加者からは、「彼らの苦労と彼らの明るさに心を動かされた」という声が寄せられた。

また新しい取り組みとしては自動車免許クラスがある。冒頭に示したように若い男性に人気が高い。免許を取るという目標がはっきりしているので勉強にも身が入るようだ。これからも彼らのニーズに沿ったカリキュラムをたてていく予定である。



難しいけど楽しいです
日本語のおしゃべりは

マンツーマンで密度の濃い授業

「中学校卒業程度の日本語の力をつけさせることは国の仕事だと思ってます。センターを出てもなかなかそのレベルに達しない人も多く、どうもそうもいってられない。そこで私たちもようやく日本語指導に本格的に取り組むことにしました」難民を助ける会の代表幹事、吹浦忠正さんは太陽塾ができるまでのいきさつについて話し始めた。

数年前円高不況の波が押し寄せたとき、輸出偏重の企業でクビ切りが行われた。まっさきにねらわれたのが日本語のよくわからない定住難民の人々である。再就職するためにはもう少し日本語の力が必要とされた。一方彼らが働く企業からも、彼らの日本語能力をなんとかしてほしいと要請があった。難民を助ける会は当初よりひまわり塾という定住難民の子弟のための塾を開いていたが、日本語教育に関しては国でやるものという理由で消極的だった。しかし日本語を教えてほしいという現場の声を無視することができなくなったのである。

場所探しには半年かかった。交通の便が良くて家賃も安いところはただでさえみつかりにくい。そのうえ外人、難民となるとどこに行っても断わられた。ようやくみつかったのが現在の南新宿のワンルームマンションの4部屋である。うち1部屋は同じマンションのテナントである日本語学校の厚意で借りている。

太陽塾では先生と生徒が1対1で授業が進められる。双方とも勤めを持っているので5時以降がピークだ。教材はその人の日本語能力と目的に応じて選ぶため、あいいうえおの特訓を受けている隣で自由民権運動を論じていることもあるという。一番の問題は先生と生徒の組み合わせだが、ぴったり合うまでお見合いをくり返している。今のところはおおむねうまくいっている。初級者にはベテラン日本語教師があたり、上級に進むにつれて、なるべくそれぞれが関心を持っている分野の専門家が担当するようにしている。1年間マンツーマンでつきあうので、家族同様に交際したりするケースが多い。また、それぞれの曜日に集まる人が水曜会、金曜会という親睦会を作ったり、教師たちの勉強会を自発的に開くなど太陽塾メンバーのまとまりは強い。「私など『勉



先生と生徒の組み合わせはじっくり時間をかけて決める
/ 難民を助ける会 提供

強のじゃまになるから来るのは遠慮してほしい』などと言われてしまいますよ」と吹浦さんは苦笑する。

塾の生徒は定住促進センターや会社などの紹介で来る場合もあるが、ほとんどは友人からの口コミである。零細企業で働いている人が3分の2、次の就職のために日本語の力をつけようと準備している人が3分の1である。難民センターを経ずに定住した人もいる。男性よりも女性の方がやや少ないが、女性の上達は早く、スピーチコンテストの入賞者のほとんどは女性が占めている。

88人の現在の生徒の8割がベトナム人で、この数字は定住者全体に占めるベトナム人の割合より高い。カンプチア人、ラオス人の居住区は神奈川県にあるので新宿にまではなかなか通いきれないのだ。

それが今年から日曜日にカンプチア語の授業を行うことになった。午前中は日本人が学び、午後はカンプチア人が学んでいる。定住難民の年配者は日本語の習熟が難しく、逆に若い人たちはどんどんカンプチア語を忘れてしまい、家庭内の対話に問題が出てきたためだ。そのためカンプチア人からの要望もあり、新たにこのコースを設けたのだという。

太陽塾は新宿駅南口から7分という便利な所にあるので、年間予算のほとんどが家賃に消えていく。少しでもその助けになればと太陽を支援する会を作った。メンバー40～50人のうち4人がベトナム人で、彼らは太陽塾の兄貴分に当たるひまわり塾の卒業生である。また別の卒業生が中心になり太陽塾の中にコンピューター教室を開いた。ひまわり塾の卒業生が太陽塾を支援し、盛り立てる側にまわっているようである。

よろず相談うけたまわりましょう

●ロス・リッティーさん一家と本浪三郎さん

新宿駅から、小田急線で一時間弱のところに、大和という市がある。ずいぶん山のなかのような気もするが、横浜、藤沢の両市の中心部から約20キロ、両市には私鉄電車が直通し、神奈川県の内都心の一つである。ここには、定住促進センターがあり、また周囲に、中小の製造業が多いこともあって、センターを出たあとも、この近くに住む難民の人が多い。

そろそろ肌寒さを感じはじめた日、定住難民の訪問ボランティアをしている本浪三郎さんに連れられていったカンブチア人、ロス・リッティーさんの一家もその一つだ。私たちはすっかり暗くなった頃、ロスさんの家に着いた。ロスさんは待ちかねていたように、二階建の木質（木造賃貸）アパートの一番はじ、道路に面した部屋のガラス戸を開けてくれた。

2Kというのだろうか、入り口に近いほうに台所手洗いなどがあり、反対側に二部屋がある。私たちが入ったのは、その部屋の掃きだし口とも言えるところからだった。

ロスさんの家族は3人、近くの発泡スチロールの成形工場に勤めるロス・リッティーさん（29歳）、新春早々に二人目の子どもが生まれる奥さんのセン・チャンターさん（28歳）、そして保育園に通う4歳になる息子ロス・チャンティアくんだ。

日本語授業よりも差し迫ったことは……

その日は県営住宅への入居手続きの話から始まった。ロスさん一家は、現在の民間の木賃アパートから、作りもよく家賃も安い県営住宅への転居を計画している。先月来、二つの住宅に申し込んでいる。その内の一つ、遠いけれど入れる確率の高いほうから、書類審査に通ったという通知が来ていた。こちららは面接に行きさえすれば、まず入れる。しかし同時に便利なほうへの入居資格はなくなる、そんな話だった。

合格通知には、面接の日に持参すべきさまざまな書類が同封されていた。市、県民税の納税証明書、

家屋賃貸契約書、家賃（領収）書面……、難しげな漢字が並ぶ書類は日本人でも頭が痛くなりそうで、ロスさんにはまるで分からないものだ。面接に行くのか、行くとしたら、どこに何時、書類はどのようなか、そんな話がしばらく続いた。本浪さんのような方がいないと、どうしようもない手続きだ。

その本浪さんは、こういうボランティアには珍しく男性の方であるが、定年後、難民を助ける会の事務手伝いのあと、始められたとか。今は周辺に男性のボランティアは一人もいないということだが、実社会に慣れた男性の存在は有意義なことだろう。

“さすがに”というのは、どんな意味か？

さて「日本語授業」は、小学一年生の国語の教科書で行なわれている。ちょうど、松任谷邦子さんの『花いっぱいになあれ』が教材だ。

まず最初に、ロスさんが音読する。

“ある日のことでした。学校の子どもたちがふうせんにお花のたねをつけてとばしました。

お花をうえましょう。お花をいっぱいさかせましょう。こういうおてがみもつけました”

つかえたり、イントネーションが変なところは、本浪さんが助け船を出す。

「意味分かる？ まず、つけるというのは分かる？ 電気をつける。このつけるとは違うよ。電気に糸をつける、糸に人形をつける。このつけるね」

と、本浪さんは、部屋の蛍光灯についた糸を持ちながら説明する。

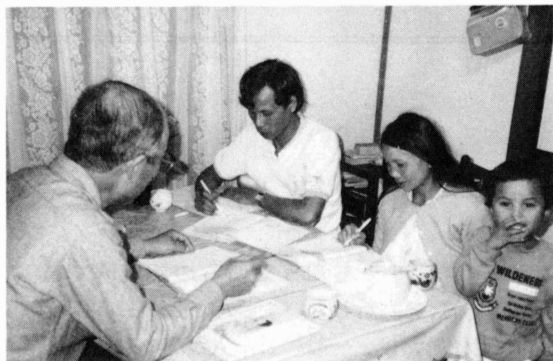
「とばすは…飛行機は飛ぶ、こうすると飛ばす」

紙飛行機を飛ばすジュスチュアが入る。

「お手紙も。種をつける、お手紙も付ける、ね」

“（中略）その風船の一つがどうまちがえたか町をとおりぬけ村をとおりぬけ、お山までとんできました。さすがにくたびれて、ふわふわ ふわふわゆれながら、お山のなかへおりてきました”

本浪さんは図を書いて、「とおる」と「とおりぬける」の違いを説明したが、「さすがに」にきてつまってしまった。この言葉のニュアンスを伝えるのはむ



本浪さんはロスさん一家のおとうさんで、すべての先生
ずかしい。しばらく考えていたが名案が思い当らな
かったようで、そばの和英辞書で「さすが」を引い
て、訳語をロスさんに示した。

ロスさんはカンブチア時代に、3年間週2時間ほ
ど英語の勉強をし、今でも日本語よりは自信がある
ということだった。しかし、私が話してみたかぎり
では、そう英語力があるとは思えない。和英辞書の
訳語“really”でニュアンスが伝わったか、疑わし
いところだ。

言葉の問題が出たところで、一つお断わりしなけ
ればならない。今回、ロスさんのところで使われた
のは、日本語だけである。本浪さんも私もクメール
語がまったく話せないし、ロスさんの英語も私たち
と意志を疎通させるには十分とはいえない（日常生
活には使えるのかもしれないが……）。したがって、
一年生の教科書を学ぶロスさんの日本語力に頼って
いる。思わぬ勘違いがあるかもしれない。そのおり
にはお許し願いたい。

なぜ専門家の学校より素人の家庭教師なのか？

「ロスさんは漢字を教えてほしいと言うんだけど、
漢字だけ覚えてもね。ほかにいい教材もないから、
孫の国語の教科書を使っているんだけど……。当
然、一冊しかないの、もう一冊は借りてきている
んだ」

と、本浪さんは話す。日本語を外国の人に教える
テキストは手に入らないのだろうか？英語には色々
あったような記憶がある。それに教科書を使うにし
ても、教師用の俗にアンチョコといわれる、参考書
があれば、もっと楽に、さらに効果的に教えること
ができるだろう……。

さて大和市には、毎日曜日開かれる日本語教室が
ある。ここでは多少はシステムティックに教えてい
るという。それなのに、なぜロスさんは本浪さんに

頼るのだろうか？

その答えの一つはすでに書いた。家庭訪問してく
れる人には、日本語教師以上の、親身な相談が期待
できる。たとえば、こんなこともあったそうだ。

ある日、炊事をしようとするが、どうしてもガス
が出てこない。ロスさん一家にはどうしたらいいか
分らない。ただできるのは本浪さんに電話すること
だけだ。もう夜の8時近かったが、本浪さんは自
動車で駆け付けてくれた。

調べてみれば単純なことだった。屋外にある元栓
を、誰かがイタズラで閉めてしまったのだ。一度経
験すれば、次からはロスさんでも簡単に気が付くだ
ろう。しかし、たぶん元栓という感覚すらない初期
には、途方にくれる難問であるに違いない。

もう一つの答えはロスさんの生活のなかにあるよ
うな気がする。ロスさんは初めにも書いたとおり、
発泡スチロールの成形工場に勤めている。その仕事
は個人作業で、同僚と話しながらするということがな
い。昼休みも体を休めることが中心であり、話すこ
とはそう多くないそうだ。しかも、1日平均3時間
近い残業に、家に帰ってテレビを見る余裕もない。
日本語はいつまでたっても上手にならない。

そんな彼にとって、最大の楽しみは同じカンブチ
アから来た人との交流に違いない。その気持ちは、
日中は家にとじこもっている奥さんには、もっと強
いに違いない。そのチャンスは日曜日にしかない。
日本語教室に行ったのではその時間がなくなってし
まう。これがたぶん、第2の理由であろう。

日本語の授業の続く、テーブルのそばで退屈した
キャンティアくんが声をあげ始める。

「ウルトラキック！」

保育園に行き、テレビを見ることも多いキャンテ
ィアくんは、日本の子と同じように言葉を覚えてい
く。彼の言葉は幼児語だがなまりはない。今でも本
浪さんとお父さんの通訳をしてくれることがあると
いう。

彼が、そして彼の弟妹が大きくなったとき、話す
言葉は、彼らより早く日本にきた人たちの例を出す
までもなく、日本語である（カンブチア人街があっ
たら）。そのときお母さんは……。

すっかり夜がふけてからロスさん宅を辞去した。
夜風が冷たくお腹の大きい奥さんもいるからと、早
くガラス戸を締めるように何度もいったけれど、戸
が閉まったのは、車が動きだしてからだった。

(AG)

教師の責任は重い

鶴岡 善和

私は今回、パナニコム日本語学校で一年間、教鞭を執らせて頂きました。しかし実際は、生徒達からは日本語を教える以上に、いろいろと教えられることがあり、逆に勉強させられました。さらに、タイは初めての海外でしたので、すること全てが貴重な体験で得ることの多い一年でした。

日本へ定住する難民に日本語を教えることは、想像以上に問題もあり、難しいことでした。それは、難民の人達にとっての日本語教育は、日本へ定住後の生活に直接関わる重要な問題だからです。就職、地域住民とのコミュニケーション、教育問題その他、日本語が話せれば話せる程、生活が送りがやすく、より文化的営みが行えるからです。その意味からも、このボランティア活動における、教師の責任も重いものだと思います。

日本語を教える上で一番気をつけなければいけなかったことは、最初に持っていた緊張感をいかに持続させていくかという点です。初めの頃は、ただ与えられた仕事をがむしゃらにしています。そして、1カ月、2カ月と日数が経つにつれて、仕事に対して慣れてきます。当然、授業の指導方法も上達していきます。しかし、ここでその慣れ、熟練してきた時こそ注意が必要で、要領を覚え緊張感がなくなってくるからです。同じ仕事をする時にも、より良い方法を考えるのではなく、なるべく楽な方法を探ってしまいがちだからです。さらに言えば、生徒達は2～3カ月の滞りで、日本へ向けて出発していきます。生徒が変われば、また同じ授業の繰り返しとなり、最初の頃の緊張感もなくなり、惰性で授業をしやすくなるからです。そのためには、常に新しく何か目的を見つけていかなければなりませんでした。

次に苦労した事は、教師は生徒に対していかなる態度をとらなければいけないのかという事でした。私の場合では特に、生徒に対する評価が甘くなりがちでした。例えば、発音です。日本人が英語を勉強するときにrとlの音が不明瞭になるように、生徒達にとって、ザ行とツの音が難しいようでした。私にとって生徒達の発音は、毎日聞いているし、生徒

のボキャブラリーも知っているのもので理解でき、これで十分だと判断していました。しかし、彼らが日本へ定住した後、一般の日本人が聞いた時に理解できるかというのは、かなり疑問です。特に日本人の場合、話し相手が外国人だと思うと、相手が日本語を話していても、外国人が日本語で話しかけてくるはずがないという考えから、相手の話を良く聞かずに理解できないと思うのではないのでしょうか。ですから、生徒達にはこれで十分という発音はなく、少しでも自然な日本語に近い発音をさせる必要があると思います。また、ここで生徒に自分達の発音で通じるといって、より自然な発音をする努力を怠らせてはいけません。このように、発音に限らず、あらゆる面で厳しく接していくことは、彼らの努力を知っているだけに難しいことでした。

最後に、パナニコムにいた日本人スタッフのちょっと信じられない悩みを一つお知らせします。それは、スタッフ全員が、標準語の正しい発音やイントネーションが何が正しく、何が誤りなのか判断できなくなってきたということです。といいますのも、タイ国内において日本人と接するという事は非常に稀なため、日本語を使う範囲が限られたからです。しかも関西弁あり、名古屋弁あり、土佐弁あり、おまけにタイ語なまりの日本語がボランティアハウスの中を飛び交うという状況で、本来教える標準語の発音がわからなくなってしまいました。そして、生徒の発音を矯正している間に、生徒の発音が移ってしまい、マイ・ルー・ルアン（何が何んだかわからない）になっていました。

このように、いろいろと考えさせられる問題も多々ありましたが、私達の熱意が生徒にも伝わり、生徒達も一生懸命日本語を勉強してくれ、定住センターである程度の評価をして頂けるようになり、生徒達の努力も、私達の苦労も報われたと思います。そして、最後に一番大きな収穫は、パナニコム日本語学校のスタッフ及び生徒達が陽気に楽しく過ごせたことでした。これからも、新しい出会いを求めて頑張っていきたいと思います。

「わたしいつ日本へ行きますか」

柿 木 光 寿

1988年7月27日、私はバンコクに立った。JVCのボランティアとして2カ月間パナニコム難民キャンプで日本語を教えるためである。私は以前より定住難民プロジェクトに参加し、毎週1回日本語家庭教師をしていたが、実際は先生とは名ばかりでほとんど役に立っていないと痛感していた。そんな時である、パナニコム行きの話があったのは。何よりも日本語教授法を学びたいと思っていた私は、定住難民の人々が日本に来る前に生活していたパナニコムという所への関心も手伝って、この話に飛び付いたのである。

パナは簡単にいうと、アメリカ、カナダ、オーストラリア、そして日本などへの定住が決まった難民の人々が入るキャンプであり、皆出発するまでの間、定住先の国の言葉や文化を学んでいる。JVCはパナで日本語学校を開き、日本に定住が決まった人々に日本語の指導、日本文化の紹介をしている。私のいた時の生徒はクメール人で、人数は21人だった。クラスはA、B、Cの3クラスあり、それぞれのクラスで午前中1時間、午後にも1時間ずつ授業を行った。授業はチャート、黒板などを使いながら、原則として日本語で進め、生徒が分からない所を英語で補足するという方法である。クラスには英語を話す人が何人かおり、その人を通してクメール語に訳してもらっていた。

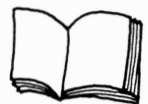
私は初心者ということも手伝ってか、初めの頃はミスが多く、生徒の人達にもたいへん迷惑をかけたと反省している。授業には流れというものがあり、ミスをする度にこの流れを切っていた私の授業は、やはり良いものとはいえない。ギクシャクとした授業は生徒の集中力をそぎ、クラスの緊張感の低下をもたらすからである。そのためスムーズな流れの授業を、と心掛けて教室に入る毎日であった。しかし、やはり経験豊富な先生と違い、インスタント仕込みの私は生徒に臨機応変に対応しきれないところが最後まであった。

キャンプは一見、明るく楽しく見える。はしゃぎ回る子供や木陰でおしゃべりしている大人を見てい

ると非常に牧歌的である。しかしこれがすべてではない。「わたしいつ日本へ行きますか」と私に聞いてくる生徒の顔には牧歌的雰囲気は見られない。最後の最後まで知らされることのない出発日を、何カ月もの間ひたすら待ち続けるしかない彼ら。加えて日本定住後の言葉や生活の問題。これらの心配、不安にじりじりと締めつけられながら彼らは毎日を送っているのである。

私は暇な時間には外へ出て、なるべく人々と接し、彼らと少しでも近づきたいと考えていた。そんなことから生徒の家もしばしば尋ねた。しかしこれは家というより小屋である。1つの小屋に3から5家族が住んでおり、1家族分の割当は3畳くらいだろうか。もっと狭いかもしれない。電気は当然ない。そして家族間の仕切りは布1枚だけで、プライバシーも無視されている。「日本人」の視点から見れば、良い住環境とはいえない。そんなことに気することもなく、生徒は喜んで私を招き入れ、もてなしてくれた。写真をたくさん持ち出して、故郷のことや日本にいる姉妹のことを次々と話す。とてもほがらかである。過去の苦難、そして現在の不安などみじんも感じさせないその表情は、私には驚きというよりも不思議なものに思えた。胸の中には様々な思いがあるにもかかわらず、こんなにすがすがしい。“強い”といったら良いのだろうか、他に良い表現が出てこない。生徒と話していると、しばしば人間はこんなにも“強い”ものだったのかと感じさせられることがあった。

帰国後の先日、生徒の人達を尋ねて大和定住センターへ行ったら（彼らは9月21日に日本へ来た）。皆長袖の服を着ており、「日本さむいです」といつもの笑顔で話す。そんな彼らとの再会を喜ぶ反面、これから彼らがぶつかるであろう困難の生活について考えていた。彼らは“強い”から大丈夫だろう——はたしてこのように楽観的に考えて良いのだろうか。



祖国を捨てた人々

五十嵐裕昌



「オレたちベトナム人はいまだかつて自由を手にしたことはないよ」と、今43歳になるヒューさんがいうとおり、ベトナムの歴史は支配の圧力に堪える歴史でした。そして今もなお、自由を求めて祖国を捨てる人が絶えません。

僕は今夏、そんな人たちがポートピープルとなってやってきたフィリピンのパラワン島にある難民キャンプを訪れました。

戦いの歴史

ベトナムの歴史は彼らがいうように、常に少数強大な何ものかが作り上げてきた歴史です。1883年に始まったフランスの植民地支配、1940年からの日本帝国の侵略、そして「反共十字軍」の名のもとにやってきたアメリカ軍、さらに共産主義による圧政へと、民衆は自由を手にする事なく、ある時はフランスの敵として、ある時は日本帝国の敵、そしてアメリカの敵、最後には同じ民族同士が敵として戦い傷ついてきました。

僕と同年のカン君は言います。「ホー・チ・ミンは日本帝国主義に立ち向かって自主独立の名の下に銃を取った。もし僕がホー・チ・ミンだったら同じことをしたと思うよ。ただ彼らは自由を勝ちとる戦いの中で、武力と支配力を備えていったんだ。これじゃあ日本帝国と同じさ」と。

彼らには祖国を捨てることしか生きる道がありませんでした。今年54歳になるタンさんいわく、「結局最初からベトナムなんて国はなかったんじゃないかな。あそこはフランス人の庭園であって、日本軍、アメリカ軍の演習場で、共産主義者の基地なのさ。オレたちの国じゃあないよ」と。この言葉こそが真にベトナムの歴史だと思いました。

ベトナム脱出

この難民キャンプは現在人口約4000人、マニラから船で2日かけていく細長いパラワン島の中にあります。彼らは主にベトナムのニャチャン市から10～40人乗りの船で脱出してきました。ある人たちはフ

ィリピンへ、ある人はシンガポールへ、インドネシアへ向けて出航します。出航といっても船は座るのがやっという小さなもので、それにわずかな水と食糧を積み、革命政府にみつからないように夜中に出発します。そして運がよければ4～5日後にどこかの国の漁船が助けてくれることもあるし、運が悪ければそのまま海の上で死んでしまうのです。

「私は10歳になる息子といっしょに脱出してきました。出発してから4日目で水も食糧もなくなり、それから3日間は雨水を溜めてそれを飲んでいました。運よくフィリピンの漁船が見つけてくれたけど、あの時漁船が来なければ死んでいました」とセンさんは言いました。彼女は続けました。「私たち日本の船も見たのよ。みんな着ている服を脱いで旗のように振り続けたの。その船一度はこちらに気がついて停まったみたいだったけれど、すぐ行ってしまったわ」。彼女はパラワン島に着いた直後の写真を見せてくれました。その中の彼女は骨と皮だけで、立っているのがやっというようでした。あまりにひどい衰弱で水さえも飲めない状態だったそうです。「ここでの生活はとても満足とはいえないけれど、ベトナムにいるよりましよ」と彼女はいいました。

ひとりひとりが肩を寄せ合う

その彼女たちは難民キャンプでは、ココヤシの葉や枝を組み合わせた家に住んでいます。居間は上段と下段とあり、合わせて15～16畳くらいの家に14～15人がひしめくように暮らしています。

朝6時になると、キャンプ内の放送局がスピーカーからベトナム語で天気予報やニュースを流します。この放送は夜の9時ごろまで音楽をかけたり、放送劇を流したりと、うるさい、うるさい。この放送で目を覚ました彼女たちは顔を洗った後、井戸に生活用水を汲みに行ったり、その井戸の周りで洗たくしたりと、朝早くから本当によく働きます。ほとんどの人が単身でここに来ているので、いっしょに住んでいるのは家族ではなくまったくの他人であり、自分のことは自分でしなければならないのです。40歳

くらいのおじさんが自分の服を洗たくしながら「オレはここに来て初めて洗たく、料理をした」と言っていました。

でも、一軒の家同士、他人とはいえ同じ苦しみ悲しみを分かちあえる家族のような雰囲気があるので。「オレは7年間ここにいて、外国人がオレたちと生活を共にするのを初めて見た」といわれたように、僕は40日という短い期間だったけれど、彼らと同じ屋根の下で寝、同じものを食い、同じ所で洗たくをした最初の外人だったようです。

この外人にとって最も辛かったのは力仕事でした。日頃、蛇口をひねれば水が出て、ボタンを押せば洗たく完了という生活にある僕は、毎朝バケツ何杯もの水を運び、こすってもこすっても落ちない汚れ物の洗たくはなかなか辛かったです。

家族を残して

そして朝の一連の日常茶飯事後、彼女たちは第三国定住に向けてキャンプ内の語学学校に通い、英語やフランス語を勉強するのです。昼前には家に回りまわり持ちで昼飯の準備をします。彼女たちの食べる配給食糧は肉あり、魚あり、米あり、野菜ありと種類は豊富のようです。ただ現在はキャンプ内の人口が増え続けているので、1人当たりの量は少ないようです。特に僕のような大食漢のいる家は食糧の需要と供給のバランスが崩れ、よく隣の家に米を借りに行ったりしてました。(どうも迷惑かけてすいませんでした)その日の昼食はサツマイモの茎と葉が具のスープ、ご飯。それにトウガラシと酢と砂糖を交ぜた辛い辛い、本当に辛いスープでした。この辛いスープをご飯にかけて食べるのです。

午後は再び学校へ行く人あり、昼寝をする人あり、近くの海辺へ泳ぎに行く人あり、再び水運びをする人ありと、様々です。そこには60歳のおばあさんもいるし、このキャンプで生まれた子供たちもいる。クリニック、市場、映画場(映画館ではなく、青空映画場なのです)、教会、寺院などもあり、キャンプ自身ベトナムの1つの村のようです。僕には平和で満たされた村に映りました。

しかし、彼らは彼らのいう“共産主義者の圧政”の下に大切な家族を残してきているのです。その家族の希望と期待を一手に引き受けた重荷は、外人の僕には解り得ないものです。そして愛する国を捨てた苦しみ、第三国に対する不安など彼らが精神的に満たされる時はないのです。

その彼らにとって最も心が安らぐのが、ベトナムの家族や先に第三国に定住した家族からの手紙を受けとった時なのです。毎日昼過ぎに、放送局がその日に到着した手紙の宛名を読み上げます。彼らは洗たくする手、勉強する手を休め、昼寝をしている人は友人にたたき起こされその放送に耳を傾けます。その日手紙が来なかった人はしょんぼり。手紙を受け取った人は大喜び。写真を片手に時にはうれしそうに時には悲しそうに家族の話を聞かせてくれるのです。

ドン君のおじいさん、おばあさん、おかあさん、3人の兄弟姉妹、2人の甥はベトナムにいます。彼は3歳上の兄さんと脱出してきました。彼のおとうさんは教師でしたが革命政府に連行されて帰ってこないのです。おじいさんは医者で、家族はおじいさんの収入に頼って生活しているのです。ドン君はアメリカにいとこがいるので、彼はアメリカ定住を希望しています。この第三国定住もその国に親類がいるかないかでずいぶん待遇が違ってきます。

話の初めに出てきたヒューさんは7年間で15回も脱出を試みて、その度に革命政府に捕えられ、牢獄に入れられ、脱走し、16回目のトライでついにベトナムから脱出できたそうです。しかし、43歳の彼には第三国定住も第三国に親類がなく、しかも元漁師であった彼は第三国にいても職につける見通しもなく、もう5年もキャンプにいるのです。彼は言います。「私には妻と2人の娘がベトナムに居る。何としても第三国への道を作らなければ」……と。そして語学学校で黙々と勉強しているのです。

そんな彼らが授業を終えて家に帰るころ、手紙を受け取った彼らが家族への返事の手紙を書き終えるころ、夕食が始まります。この日の夕食は煮魚とご飯、さつまいもの茎葉スープ、そして例の辛いスープ。1匹の魚を4~5人で分け合って食べます。食事の後にはそれぞれ家族から来た写真や手紙を見せ合ったり、音楽を聞いたり、そして毎日食後のかたづけをするのが僕の役目でした。

夜になるとみんな毎回決まったように、ベトナム語に吹き替えられたカンフー映画を見に映画場に行きます。

その後、家に帰ってきた彼らは充分手足を伸ばせない狭い家の中で横になりながら、時にはろうそくの灯りの下で、時には暗闇の中で話しはじめるのでした。(つづく)

寄付をすることで見返りは期待しません

JR線三鷹駅から歩いて10分ほどの所に、黄檗（おうばく）宗禅林寺というお寺がある。小説の好きな人なら、この名前を聞いてピンとくるかもしれない。『走れメロス』『斜陽』などを書いた太宰治や森鷗外の墓があるお寺である。このお寺の住職の木村得玄（51才）さんに、今回お話を伺った。木村得玄さんは禅林寺龍華（りゅうげ）会を通じて、昭和58年から継続的に（昭和61年を除く）JVCの難民定住プロジェクトを財政面で支援して下さっている。

●龍華会の名前の由来は

お釈迦様が死んだあと56億7千万年のちに、彌勒（みろく）菩薩が天からこの世にくだってきて人々を救うといわれています。来臨の時に説法を3度するんですが、その法会の名称を龍華と言うのです。おそらく全国には、この言葉をとったお寺の名前が10以上はあるでしょう。

●具体的な活動内容について教えてください

大きな柱としては2つあります。一つは日本に興味を持っているアメリカの高校生を招待しています。期間は1カ月間で、今年は8人来てもらいました。そして、もう一つが仏教系大学に出している貸与奨学金です。卒業してもなかなか回収できないので、ちょっと困っているところです。

その他には、都から認められていない福祉団体や公的に救済されずに困っている個人へも援助しています。要するに、大きな福祉団体や公的な救済資格を得ている人たちはよいのですが、その陰で援助を受けられずに困っている団体や個人に小回りのきいた援助をしようということです。その活動の一環として、来日して定住センターの手を離れた、いわば公的機関から離れた定住難民のプロジェクトに寄付しているわけです。きっかけは、知人の紹介で訪れたJVCの専従職員の要請です。JVC以外では交通遺児育英会に毎年寄付しています。また、三鷹市民に限定して、困っている人たちに毎年10台ぐらいずつ車イスを贈っています。しかし、私たちは贈呈式をやったり、車イスに龍華会という名前を入れたりしないようにしています。

●それはどうしてですか

仏教の経典の中では、見返りを期待する寄付はするなと書かれているところが多くあります。ただそれを守ろうとしているだけです。それに、もらう側としても何もついていなければ、もらったのか自分で買ったのか本人以外にはわかりませんから、その方が使い易いのではないのでしょうか。もしもらった人が龍華会からもらった物だと言いたければ言えはいいし、言いたくなければ何も言わなくてもいい。それはもらった人が決めればよいことです。

●寄付先の決定には基準があるのですか

厳密にはありません。会の目的の四項目のいずれかに該当していれば、いかなる団体も個人も対象となるわけです。しかし、これが一番難しい所です。というのは、こちらは5人の運営委員がいるだけで時間も労力も限られている。だから、どうしても知り合いからの情報を元にして選定するということが多くなりますね。

●1年間でどのくらい寄付をするのですか

会が発足した昭和56年ごろは少なかったのですが、今では徐々に増えて、およそ1千万円を使っています。

●基金はお寺の檀家から集めているのですか

今までに何度か呼びかけて、基金を募ったことはありますが一銭も集まりませんでした。従って通常の寺の収入を積みたてて基金に回しています。檀家の関心はほとんどないと言ってよいでしょう。まあ、とはいうものの、檀家には寺への奉納金もあるのでそれ以上はちょっと、ということでしょう。

●龍華会基金を思い立ったきっかけは

特にきっかけはありませんが、構想自体は昭和40年代から持っていました。基金の目標額5千万円に達したのが昭和53年ごろで、その3年後に活動が始まりました。こういった救済運動に対して、宗教関係者はすべて関心があると思います。昔からそういう人たちがいたのです。例えば、聖徳太子はたくさん福祉事業を行なったことで有名でしょう。私自身も仕事柄、こうした事をするのは当然の事だと思っています。

専門技術だけでは 活動はできない

嶋田三芳

JVCは、カンブチア難民の大量発生という混乱のなか、特に専門的技術も持たない民衆が中心となって設立された。しかし、いざ活動をまともに継続しようとすれば何らかの専門技術も不可欠だと痛感し、機械関係、語学関係、医療関係、農業関係などの専門家も迎えてきた。そのため、活動の質と量が拡充されたが、新たな問題も生むことになった。それは、専門家または技術者と称されるスタッフと、特に専門技術を持たないと自認するスタッフとの間で起こりやすい「基本的認識のズレ」である。

そこで私は、この「基本的認識のズレ」を見極めたうえで、JVCが必要としている人材の一面を明らかにしたい。

そもそもJVCは、ある特定の対象者に深く関わることを活動の出発点にしている。単なる評論家集団ではない。ところが一方では、この姿勢がスタッフの視野を狭くし、スタッフ間に「基本的認識のズレ」を生むことがある。

例えば、海外で活動しているスタッフに「機関誌用の記事を送って欲しい、広報用の写真も」と言っても、実際なかなか送ってもらえない。毎日忙しくてそこまで手が回らないことも一つの理由だが、考え方の違いによることが多い。そのような場合、「オレたちは現場で頑張っているんだから、広報は東京の連中がやって欲しいな。それが東京のスタッフの役割だろう」という回答が返ってくる。本来自分が今、その場で行っている活動はより広い関係の中で成立しているのだが、この基本的認識がズレていると前述のような答えになる。

しかし、一見矛盾するような両者、つまり、対象者に深く関わることと、より広範な相互関係のなかに諸状況を捉えることを私たちは両立しなければならない。もし両立できないならば、その活動は場当たりの「お助け仕事」の域を出ず、社会に対する影響力は微弱にならざるを得ないだろう。

この2点を両立するには、活動に関わる者全員が

「専門バカにはならない」ことである。「専門技術が何だ。たかが技術じゃないか」というくらいの認識に立つしかない。時代の変遷によって浮き沈みするような知識に振り回されず、時間と地域を縦横に結びつける知恵を持たねばならない。

とはいえ、これは非常に難しい。つい目先の事柄や権威ある知識の迷路に実にたやすく落ち込む。ここで今後の参考に、自分が担当するソマリアから2つの事例をあげておこう。

他のNGOをまねてJVCソマリアも難民キャンプでパン屋プロジェクトを2年前から始めた。難民に配給される小麦粉をおいしく食べられるようパンに加工し、ついでにパン屋としての商売も成り立たせ、難民の自立も図ろうというプロジェクトだ。一石二鳥の素晴らしい活動のようだが、目先の事柄にとらわれた活動であると最近思えてきた。なぜなら、難民がもともと住んでいた地方でも、またソマリアでも小麦はほとんど取れないのである。パンに味をしめた彼らは、難民でなくなった場合、輸入小麦に依存するしかない。自分もこの活動に関与しているので、何らかの措置を講じなければならないと思っている。

もう一つの例は、発電と農業灌漑を主目的に世界銀行の融資で、ジュバ川下流にダムを建設する計画である。ソマリア政府は農業生産物の輸出利益によって世界銀行に借金を返すつもりのようなのだが、十分な輸出利益があがらない場合、そのしわ寄せは民衆にいくだろうと危惧する。今こそこの問題を真剣に捉え、何らかの可能な行動をとるべきなのだ。しかし残念ながら、JVCソマリアに限らず、ソマリアで活動するNGOがこの問題を提起したとは末だ伝え聞いていない。先進国のお金が世界銀行を通じてソマリアに投資され、果てはソマリア民衆を苦しめるかも知れないのに。

ことごとさように、物事を広い視野で捉えることと、物事に深く関わることの両立は難しい。だからこそ、「専門バカ」になってはいけないのである。自分の生活や活動は、それを取り囲む社会や自然環境に大きく関係していることを常に私たちは認識しなければならない。社会を根底から良くしようと志す人々はこのような姿勢を持ちたい。

社会システムの複雑化により分業化が急速に進んできた。しかし、これは自らの体や心を切り売りするようなもので、決して望ましい道ではないし、本当の幸福からは遠ざかるばかりである。

かみなりさまと宝石

民話というのは不思議なもので、互いに遠く離れた異国の民話がそっくり同じだったりすることがよくあります。私がJVCにかかわって東南アジアに興味を持つことがなかったら、このようなことにも気がつかなかったでしょう。

初めに紹介するカンプチアの民話は、民話の持つイメージの奇抜さや日本民話のモチーフとの類似の面白さに加えて、男役と女役の描かれ方にも思わず笑ってしまうのではないのでしょうか。(村田広平)



むかし、この世が始まったばかりのころ、ラーマサーという男の鬼と、メーカーラーという女の鬼がいました。ふたりは魔法の術を習いに仙人のところに弟子入りしました。いっしょうけんめい修業したかいがあって、どちらもたいいの術を覚えてしまいました。ある日、仙人はふたりを前に呼んで、

「もうこれ以上お前たちに教えることはない。ただ、お前たちのうち、どちらでも、露をさかずきいっぱいにして先に持ってきた者に魔法の宝石をやる。この宝石さえあれば、お前たちの願いはなんでもかなえられるのじゃ」と、言い渡しました。これを聞くとふたりは喜んで森に露を取りにでかけました。

ラーマサーのほうは、朝早く森にはいり、木の葉や草の葉をゆすぶって露を取ろうとしましたが、なかなかさかずきいっぱいになりません。次の朝もしんぼう強くさかずきを受けていました。

ところが、メーカーラーはぬけめがない女鬼だったので、しんのやわらかい、水気の多い木や草をしぼって露を取ることを考えつきました。露はたちまちさかずきいっぱいになりました。メーカーラーがそれ

を仙人のところへ持っていくと、仙人は約束どおり魔法の宝石をメーカーラーにさずけ、こう言いました。

「この宝石はふしぎな力を持っている。お前が何かしたいことがあれば、この宝石をにぎって空中にふりまわすとよい。望みならば、空の上にも、海のはてにでも、ひとつ飛びで行けるのじゃ」

メーカーラーはその宝石をもらい、仙人に別れを告げると、宝石を頭の上にふりかざして、遠い大海のほうへ飛んでいってしまいました。

さて、ラーマサーは、あれからずいぶん長い間かかってやっとさかずきいっぱいにし、仙人のところに持っていきました。仙人はラーマサーを見て気の毒そうに言いました。

「お前は来るのが遅れたようじゃ。宝石はメーカーラーに先にくれてやって、もうない。わしの魔法では一度きりしか、あの宝石は作れないのでなあ…」

ラーマサーはこれを聞いてたいそうくやしがり、おいおい泣き出してしまいました。仙人はあまりかわいそうだと思って、ラーマサーをこうなぐさめました。

「そんなに悲しむことはない。お前にはこの宝石の代わりにこの斧をやる。この斧はメーカーラーにやった宝石と戦う力を持っているのじゃ。メーカーラーは雨が降ると、宝石を使って空中に舞い上がり、雲の上で水浴びをするくせがある。その時をねらってこの斧を空に放り投げると、メーカーラーは驚いて宝石を手から放すに違いない。だが宝石がまわって光っているうちは、けっして目をあけてはならないぞ」

ラーマサーは斧を手にしかり握って、すぐにメーカーラーを探しに出かけました。しかしメーカーラーは魔法の術で、ラーマサーが自分をねらっていることを見ぬき、宝石を振り回して空高く逃げていきました。

その時、宝石から目のくらむような強い光がきらめいたので、ラーマサーはハッと目を閉じました。その光が消えるか消えないうちに、ラーマサーは手に持った斧を「えいっ」とメーカーラーめがけて放りなげました。残念にも斧はメーカーラーに当たらず、「ゴロゴロ…」とものすごい響きをたてながら天空を転っていきました。

それからというもの、大雨が降るたびに、空の上でメーカーラーの宝石がきらめき、ラーマサーの斧がとどろくようになりました。カンプチアの国では、こうしていなびかりと雷が生まれたのです。

(さえら書房『中国・東南アジアの民話』より)

チャリティーウォーク かながわ '89

10月16日、横浜市で第2回「チャリティーウォークかながわ」が開催された。秋晴れの青空の下、横浜スタジアムのある横浜公園に家族連れや若者グループなどが集まり、午前10時の開会式の後、各々のペースで歩き始めた。今年は昨年のコースと多少異なり、赤レレガ倉庫、中華街、元町をはじめとする横浜の名所を中心とした約9キロのコースだった。

参加者は350名と、当初の予想ほどは伸びなかったが、横浜公園の本部前で行われた劇団JVCのパフォーマンスや、ゴールした人への抽選会などもあり楽しい1日だった。(山口)



パナニコムの新日本語教師

竹村雅義さんと鈴木由子さん

日本への定住が決まった難民が日本語を学ぶパナニコムキャンプの日本語学校の新しい日本語教師とコーディネーターに、竹村雅義さんと鈴木由子さんが派遣された。フォード順子さんの仕事を2人で協力しながら引き継ぐことになる。竹村さんの方が日本語教師としての経験が長く、鈴木さんは英語が得意ということから、日本語教師としては竹村さんが責任者に、鈴木さんがコーディネーターになることになった。

JVCに来るまでは2人とも難民のことはほとんど知らなかった。鈴木さんは最初パナニコムの日本語



「スコティッシュ・ナイト・イン・専修寺」

大成功!

11月5日(土)の夜、東京西五反田にある浄土宗の専修寺でチャリティーパーティが開かれた。これはJVCのラオスの活動費捻出のためILC英語学校の教師であるイングリッド・マーティさんが中心に企画されたもの。150人以上の人々がスコットランドフォークソングとダンスを堪能した。

専修寺の副住職の加藤さんは浄土宗東京教区青年会のメンバーとしてすでにカンブチサの給水プログラムを支援していただいている。ニッカウキスキーより当日の飲み物は提供され、40万円以上の収益を得ることができた。皆様のご協力に感謝します。(竹内)



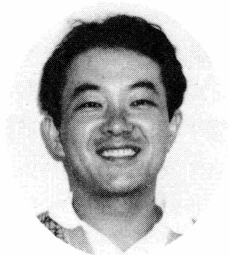
カラオケ大会で

JVCに募金

11月13日、小春日和に恵まれた日曜日に、下町は足立区梅田のエル・ソフィアホールにおいて、第2回チャリティー芸能大会が開催された。主催者である歌謡同好会つくしの会長野田力平さんがJVCの活動に関心を持たれ、募金箱の設置、パネル展示などにより「犬養道子みどり一本」に協力された。

会は朝9時に始まり、午後4時に終るまで87人もの出場者がそれぞれにノドを競い、終始なごやかなふんいきだった。この会は毎年4回行われており、野田さんは今後もJVCに寄付をしたいと述べている。

なお寄せられた募金は、第1回目(9月7日)が39,443円、今回は30,014円であった。(富安)



竹村雅義さん



鈴木由子さん

教師を“海外の経験を積む”ということにしか考えていなかったのが、難民の実情を知れば知るほどその責任ととまどいを感じるようになったという。しかし今は暖かくも厳しいフォードさんの特訓の結果、2人とも次期コーディネーターと日本語教師として準備万端整ったことと思う。睡眠時間4時間という激務、がんばって下さい。

加藤明彦さん

ボランティア登場8



もう去年のことになりますが、加藤さんと佐々木さん（そう、JVCの名経理です）の結婚披露宴に出ました。加藤さんが勤務しているキャノンの上司や同僚、後輩の女性達の見る前で、彼は劇団JVCの仲間たちと、難民救援を訴えるパントマイムを演じたのでした。会社では募金活動一つしない私は、その勇気と自信に感心したものでした。もちろん、加藤さんとは普段からよくお会いするし、お酒を飲んだりもします。ですが、このことは聞けませんでした。今回のインタビューの相手が彼に決まったとき、きっと聞こうと、心に決めていたのです。

「会社にJVCに來ているとって平氣なの？」

こういう“核心”に迫る話は後回しにして、ごく普通に経歴からうかがいました。彼のボランティア歴は長く、JVC設立の年、1981年にさかのぼります。当時上智大学の4年生だった加藤さんは、大学の難民救援チームの一員として、タイの難民キャンプに出かけました。それが始まりです。そのとき会ったラオス人家族と姫路のキャンプで再会した物語は、T & Eの第3号に載っています。

翌年、キャノンに就職した加藤さんは、JVCで全国縦断写真展「インドシナからやってきた子どもたち」などの活動をしませんが、82年から3年間、会社の仕事でドイツに赴任します。そのドイツ時代にも加藤さんの活動は止まりません。

「ドイツには、2万5000人ほどベトナム難民がいるんですが、その子どもたちの写真を撮って、写真展をしました。またこの時期、パントマイムを習ったのが、大きかったと思います」

帰国後始めたのが『始まるまで待てない』のプロジェクトです。これは、JVCの東京オフィスに、なにか自分にもできることはないだろうか、そう思ってくる人を巻き込むプロジェクトです。スタッフの人たちは忙しくて、なかなか国内の活動に時間がさ

けないのです。

このプロジェクトでは、いろんなことをやりました。難民の人とのサッカーの試合。映画『国境を越えた人々』の映写会、山谷の人たちとの交流……。今も週一回集まって活動が続いています。そんななかからパントマイムをやりたいという人たちが集まってきました。

「劇団JVCは、この秋は、ずいぶん忙しかったですよ。熱帯雨林行動ネットワークでしょう、スコティッシュパーティ、アジア人留学生の会……。年に30回くらい公演をしています」

と加藤さんがいう劇団JVCはパントマイムのグループ。もう3年になる劇団員の演技力と、舞台装置・音響装置不要（路上のパフォーマンスも得意です）と弱小主催者に便利なこともあって、今や引っ張りだこの状況。行く行くは、パントマイムを技術とするNGOにもしたいと、夢はふくらみます。

もう一つの活動は、脱原発の『伝書鳩プロジェクト』など、環境問題に対する取り組みです。

活発に、長い間活動を続ける加藤さんに「どうしてですか」と聞いてみました。

「出合いがいっぱいあるから。普通の生活をしていたら、新しい人には、そう会えないでしょう」

加藤さんは何の迷いもなく答えてくれました。

いよいよ、一番気になっていたことを質問です。

「ぼくは、職場では会社人間なんですよ。同僚と比べても仕事はよくやっているほうだし。結婚式まではパントマイムも宴会の余興にするぐらいでした。

キャノンにはノー残業デーというのがあって、水曜日は一切残業してはいけないことになっているんです。だから『待てない』のミーティングは水曜日をあてているし…。」

人一倍働いているという自信があるから、職場でも活動をしていると言い切れるのでしょうか。公務員の皆さんには分かりづらいかもしれませんが、一般の企業でこういう活動をしていると公表するのは勇気がいることなんですよ。

それはともかく、いま『待てない』でやっているJVCを研究するプロジェクト、頑張ってください。21世紀に向けて、JVCと世界の未来がかかっています。

(A.G.)

JVCプロジェクト

1988年11月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 毎月第2, 3土曜日 午後2時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 加藤志保, 林 達雄 前川昌代, 鶴田三芳, 古西 勇, 富安光子, 岩崎美佐子, アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC神奈川)	神奈川県内における渉外, 事業計画, 情報収集, 資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画, 運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション。		山口誠史
日本国内	●定住難民プロジェクト ●ボランティア有志により4月来製作が続けられてきた『ボランティアハンドブック』が完成した。この冊子は, 長い間ボランティアが試行錯誤しながら蓄えてきた定住者と関わる際のノウハウと経験を, 新たに活動する人に伝える目的で作られたものである。 ●7月から開始したラオス語のテレフォンサービスは担当者が病気のため中止せざるをえなくなった。しかし, このことは定住者自身がプロジェクトに積極的に参加してもらうという方針を変更するものではない。別の形で参加できるようひきつづき努力したい。 ●『もしもしあのね』第8号を発行した。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金, 「国際交流ボスピタリティトラスト」, 日本少林寺拳法連盟 特別養護老人ホーム「さくら苑」	山口誠史, 谷本栄子, 他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている“さかさま農園”や山武ボランティア協会などと, 毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (ウォロ州)	●緊急食料援助(コレブを中心に) 88年の大雨期には例年以上の降雨が見られ, 干ばつは終わりをつげた。しかし, 雨量が多すぎ, 作柄は良くない。また食糧輸送もとどこおりがちである。 ●総合的復興促進(マーシャ) 1. 植林, 土壌保全 7月中に山間部の土壌保全用の植林を終え, その後, 村人たちに苗木を配り各家庭に植えてもらっている。 2. 母子保健・栄養 家庭菜園, 離乳食等の訪問形式による指導が母親自身の手で行われつつある。 3. 給水 清潔な飲料水確保のため, 泉の保護をしている。 種子銀行, 農業教室も引き続き行っている。	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動, 日本少林寺拳法連盟, モラロジーMIRC, 東京グリーン・ウォーク, 西本願寺, ジャパン・タイムス, チャリティ・サイクル, Tree for lifeの会	鈴木直喜, 山田 盛, 伊藤達男, 伊藤幸子, イエットベルク, ソロモン, バレタ, ダニエル エシャトー, トーマス シュクール

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	婦人2人の口論が発端で難民同士の発砲事件があり、死者2名、重体1名、負傷2名が出た。将来への希望を抱きにくい難民キャンプ、異なる部属が狭い地域に混在する難民キャンプでは時々このような死者が出てしまう。 ●農業による自立促進 UNHCRからの物資供給や資金拠出が遅れたため、プロジェクトの進捗が若干影響されたが、すでに11番目の農場の建設も終えた。10月から11月にかけて例年並みに雨が降り、農民たちは作付けに追われている。 ●植林 相変わらず難民からの希望が強く、常時5,6種類の苗木を育てている。 ●現金収入 水屋、かじ屋、パン屋、靴屋、焼物屋を継続中。 ●コミュニティー・サービス 女性の地位は家庭内でも社会でも低いなかで、この活動が彼女たちを勇気づけている。	UNHCR, 仏国土をつくろう会	金子一弘、モハメッド・アブディ、シアッド、荻ノ迫善六、中野周二、磯田厚子、モハメッド、ラシッド、アオキ、アブディ・ジョフ、ムハボ、アブドラーヒ、アブディナサル
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	初収穫があった。農場の周囲に移り住むようになった難民は9家族から20家族に増加し、今もその流れが続いている。 これに刺激されたほかのグループ(難民、地元民)がJVCに協力を依頼してきた。このグループに対しては今年末から来年にかけて協力したいと考えている。	R.I.-Japan 創価学会青年平和会議	シュクリ
カンボジア (プノンペン) (カンダール県)	●サントビエップ技術学校 / ワークショップ 現在までに、3台のトラックのエンジン・オーバーホールを終えた。中程度や簡単なオーバーホールを合わせると、合計60台以上のトラックを修理したことになる。技術学校では9月から第2期の研修が始まり、孤児院からも2名の者が参加した。自動車労連より寄贈されたフォークリフトが到着した。次回の6カ月コースのカリキュラムが完成した。 ●井戸掘り 農業省水利局の井戸掘りチームは、9月12日から井戸を掘り始めた。ワークショップ用の2本の井戸、トゥルタボン寺小学校の井戸はすでに完成した。プノンペン郡で2本の井戸を完成したあと、カンボット県で20本の井戸掘り活動を行う。 ●RINE(ライン)プログラム(母子保健活動) ライン・センターの建物は10月3日に落成した。落成式に合わせて、日本からJVCとSHAREの代表団が現地視察を行った。日本の病院より寄贈された光学顕微鏡が、保健省母子保健局に届けられた。各郡から32名が参加した年4回の保健スタッフ訓練が完了した。 JVC技術学校の交換部品購入資金などの支援を求めるキャンペーンを実施中です。あわせて、資金不足のため建設が中断しているカンダール・ストゥン郡小学校完成のための80万円カンパを求めています。	創価学会青年平和会議、モラロジ・MIRC、立正佼成会、自動車労連、西本願寺、善興寺ダーナ基金、高岡寺族青年会、覚法寺、「チャリティ・ウォークかながわ」、日本少林寺拳法連盟、毎日新聞大阪社会事業団、大竹財団、東京都社会福祉協議会、国際ソロプチミスト千代田、明るい社会づくり運動神奈川県協議会、浄土宗東京地区青年会、和平基金、国際保健協力市民の会(SHARE) 仏教救援センター	熊岡路矢、簗田健一、簗田玲子、馬清、釘村千夜子 [カウンター・パート] (運輸省) タック・カン、アム・ディエン、メアス・サメット、ゲット・ゾン、カム・ボラ (保健省) アン・サルン医師 (カンダール県保健局) ニム・ニエム医師

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動 ④日本人主婦ボランティアとの連絡調整 ⑤季刊「ニューズレター」（英語、タイ語）の発行 ●11月14日はUNHCRと、18日はオランダ外務省と来年度のカオイダンププロジェクトの予算について協議した。 ●11月20日、泰日協会学校運動会で主婦ボランティアが中心になり、古本等のバザーを行い6,340パーツの収益があった。 ●11月23日、主婦ボランティア宅にてミニバザーが開かれ、食品、ハンディクラフト等の売り上げが7,571パーツになった。	全国社会福祉協議会	ボンビモン・チャイブーン、カモン・ミンムアン、スニー・ティチャリヤクン 熊沢ゆり チャタヴァデ・モンコン
カオイダン （カンブチア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 カンブチア難民に対し、単車、自動車のエンジン構造、電気回路、溶接及び家庭電気配線などの演習による技術訓練を行っている。 来年度以降の計画として、難民の自主的本国帰還を前提とした竹細工、水汲みポンプ、魚網などの新しいプログラムを国連に提案した。	UNHCR, SV (Stichting vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム、清水俊弘、大石道子
パナニコム （第三国定住待ち カンブチア難民）	●日本語学校 ●日本定住予定者 ①日本語学習の基礎（読み、書き、聞きとり） ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ●日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深めてもらう。 10月31日、新たにラオス難民が6人到達し、11月1日から4人が日本語の勉強を始めた。 11月25日、文化オリエンテーションをした。（日本紹介フィルムと日本映画の鑑賞。すきやきパーティ）	天理教千葉 R.I-Japan	フォード順子、アナン・ブダミリンパティープ 竹村雅義、鈴木由子
地域開発 （バンコク市内の スラム地区） （ブリラム県の M村）	●奨学金プロジェクト スラムの子供たちに奨学金を支給。 ●クロントイ図書館 ●スラム生活改善プロジェクト 高速道路建設による立ち退きについての会議に出席。 ●農村開発 M村の共同農場で収穫があった。 M村と近くの農村の46名が11月11～13日、スリンのNET財団の統合農業研修に参加し、スリンの農家を訪問した。	モラロジーMIRC, JOFIC, We Love Asia Tree for life の会 雄勝町町内寺院会 国際ソロプチミ スト駿河	バティイ・チャンスリヤ オン、サムルアイ・ジョン ヨークラン、リーラ・クンナロン、コメン・スンスマン 今泉 恵
ラオス （ヴィエンチャン）	●生活改善指導員養成プロジェクト 婦人を対象に母子保健、幼児教育、家政一般、農業等の一般知識修得並びに実習をラオス婦人連合保健省、教育省などの協力を得て行う。 生活改善指導員養成センターの建設は7月15日に着工した。完成予定は1989年春。 1988年11月にはセンターでの指導要項を作製するため、ヴィエンチャンに隣接する3県の農村で実情調査を行う。	庭野平和財団 難民と地球の緑を 考える会	谷山博史、前田初江

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (11月小計 22,000円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (11月小計 459,579円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (11月小計 9,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (11月小計 778,100円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (11月小計 85,000円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金 (11月小計 120,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (11月小計 0円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (11月小計 501,025円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (11月小計 3,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (11月小計 46,560円) ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (11月小計 282,850円)

編集後記

▶日本語教室の授業も終わり、さてこれからインタビューという時に突然桜井さんが切り出された。「申しわけないのですが、いっしょに病院まで行っていただけませんか。そこの待ち合い室でお話します」。聞けば御主人が倒れられて入院中なのだという。さっきまで落ちついて日本語を教え、生徒たちと談笑していたのに。私はその沈着冷静さと責任感に驚いてしまった。私だったらとくにインタビューなどキャンセルしてしまっただろう。ボランティアに対して「暇だからできる」とか、「自己満足」とか、そんな批判的な声も聞かせるが、「ハンパじゃできない」、つくづくそう思った。



▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)

加入者名—JVC東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497

(11月小計 695,010円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けることになりました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

昭和63年12月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎ 03 (834) 2388 FAX : 03 (835) 0519

Telex : 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易セ

ンタービル9F 財神奈川県国際交流協

会内 ☎ 045 (671) 7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。